

対立・コンフリクトを避け内に向かう言葉 －「かなと思う」の意味と使用－

鈴木智美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

tmsuzuki@tufs.ac.jp

1. 本稿の目的

ここ数年、テレビの報道番組や時事的な内容を扱う番組などを見ていると、男性の評論家が解説を行う際、男性の政治家が記者会見を行う際、あるいは一般の男性などが、街頭インタビューなどで意見を求められた際に、「～かな（あ）と思います」という形式を用いて、自身の見解・意見を述べるようすが、たびたび見られるようになってきている。

(1) 歴史学の専門家（男性・40代～50代）の発話

<毛利元就にまつわる「三本の矢」の逸話が史実ではないということについて>

「(たとえ史実でなくても、そこから) 歴史学の世界に入っていくのもおもしろいかなと思います。」(2014年6月24日(火)「スーパーニュース」フジテレビ)

(1)で、歴史学の専門家は、昨今の歴史ブームについて、興味を持った逸話が史実と違っていたとしても、それをきっかけに歴史の世界に入っていくのも悪くないというコメントをしている。この場合、話し手は通常のいわゆる意見表明の形式を用いて「(そのような興味の持ち方も) おもしろいと思います(よ)」、あるいは「おもしろい{のでは／んじゃ}ないでしょうか」「おもしろい{のでは／んじゃ}ないかと思います」と述べることはもちろん可能である。が、なぜここで「かなと思います」という形式を用いているのだろうか。

発言者は、社会的・政治的な問題等について、解説を行ったり状況を説明したりする立場に立つ、何らかの専門性を有した男性であるか、あるいはある事柄について意見を表明することを求められている有識者や一般の成人男性である。また、発言の場面は、社会的・政治的な事柄などについて解説したり意見を表明したりする、どちらかと言えば多少固い話し方が期待される場面ではないかと考えられる。これらの特性と、この「かな」という形式についての従来の記述(「独り言」あるいは「くだけた話し言葉」であるという点)との異質性が目につき、本稿の分析者にとっては気になる表現の1つとなっている¹⁾。

本稿では、「かなと思う」を1つのまとまりを持った表現してとらえ、上記のような形でこれが意見表明に用いられる際の意味・用法について仮説を提示することを目的とする。

2. 先行研究による記述

2.1 「かな」

日本語教育関連の指導書などにおける「かな」の記述を確認してみると、以下のようになっている。(以下、執筆者が内容をまとめ、適宜下線を付した。)

- (2)文化庁(1990:210):「疑問」の意味を表す。話しことばで使う。自分の疑問をひとりごとを言うように表す場合、相手に質問する意味を表す場合、「～ないかな(あ)」の形で「そうならばいい」という願いの気持ちを表す場合がある。
- (3)グループ・ジャマシィ(1998:81-82):自分自身に問いかける気持ちを表す。くだけた話しことば。ひとりごとで、不思議に思う気持ちや疑問の気持ちを表す。聞き手に向けられた時は疑問の表明で、遠回しに許可を求めたり依頼したりする気持ちを表す。
- (4)白川監修(2001:263-264):命題の真偽について話し手が疑いを持っていることを表す。独り言でも使える。聞き手がいる場面で使われると聞き手に尋ねる意味になるが、上昇イントネーションはとらない。
- (5)泉原((2007:1035):「問いかけ」と「疑い」に使われる。主に<非敬体>で使われる。主に独り言で「～ないかな」は「希望」を表し、他者対話の「～くれないかな」は「依頼」、「～ないものかな」では実現不可能なことを「願望」することになる。

以上の記述をまとめれば、「かな」は主として話しことばで用いられ、話し手自身の疑問の気持ちを、話し手自身に問いかけることを主たる働きとする表現であると言える。

2.2 「と思う」

「と思う」について、松岡監修(2000:124)は「話し手の個人的・主観的な考えを明示する表現」としている。ただし、小野(2001)は、「と思う」は、聞き手に対する働きかけを有しており、その「働きかけ」には2種類あるとしている。(以下、各例については、本稿の執筆者が多少形を変えて引用し、適宜下線を付している。)

1つは、話し手が、話し手の思考内容を聞き手に働きかける「共有思考タイプ」である。例えば「現実のほうがドラマチックだと思います」のように、「現実のほうがドラマチックだと思いませんか」という形で、聞き手にその思考内容を確認する形式に置き換えることが可能だというものである。もう1つは、「個有思考タイプ」で、例えば「この続編書きたいなって思う」のように話し手自身の希望を述べたものや、「あなたも覚えていてくれると思う」のように、聞き手の領域において聞き手に判断する権利のあるものである。

2.3 「かなと思う」

「かなと思う」を1つの表現として取り上げたものに小野(2006)がある。そこでは、「かなと思う」述語文のコミュニケーション機能について、話し手の思考判断などの「内的活

動」と、聞き手への伝え方という「外的活動」の2つの面からアプローチが試みられている。「かなと思う」という述語形式をとる場合、「内的活動」としては、「思考主体の意見がすべてではない」ことを表すことで、話題に関係のある人や組織、他の意見への配慮を示し、また、「外的活動」としては、強い意思をやわらかな印象で伝えたり、自分自身の評価を控えめにする機能があるとする。「他への配慮」や「和らげ」がキーワードとなっている。

ここでは、「かなと思う」を注目すべき表現として取り上げたことに大きな意味があると思われる。しかし、観察された個々の事例に即して、それぞれの文脈をかなり読み込んだ上で上記のような記述が行われており、また「配慮」や「和らげ」がなぜ行われるのかという点については踏み込んだ記述がないことなどから、「かなと思う」を用いた意見表明の本質・核心が、必ずしも明確に集約された形では記述されていないように思われる。

3. 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) の事例検索

BCCWJの検索ツール「少納言」を用いて、国会会議録(1976～2005年、159件、約510万語)のサンプルを対象に、「かなと思」で単純に文字列検索を試みた。年代ごとに件数を見ると、1970年代は4例(うち1例は「かなあ」)、1980年代は18例(うち1例は「かなあ」)、1990年代は73例、2000年代は69例観察された²⁾。以下、発言委員の氏名から男性の発話と考えられるもののいくつかの例である。

(6) ひとところに比べると大分感じが違うかなと思っております。

(国会会議録/参議院/常任委員会 第142回国会 1998年)

(7) 先ほど大臣のお話にもございましたように、「環(わ)の国」日本、非常にいい言葉 かなと思います。これを具現化していくことが非常に重要かと思うのですが、…

(国会会議録/衆議院/その他 第151回国会 2001年)

(8) きちんと育てられる、そういう仕組みもないと少子化というのはなかなか厳しいの かなと思っております。(国会会議録/参議院/その他 第163回国会 2005年)

4. 「かなと思う」の意味・用法仮説

鈴木(2012)では、ブログ等に見られる「ありがとうございます」「よろしくです」など、感動詞相当句に「です」を後続させる表現について、その機能は、読み手とのコンフリクトを避けるためのストラテジーではないかと考えた。不特定の読者に対し直接「ありがとうございます」「よろしく」と感謝や依頼を述べるのではなく、単にそれが自分の判断であるかのように「です」を用いることで、読み手に心理的負担をかけることを避けていると考えるものである。

本稿において取り上げた「かなと思う」についても、似た機能が働いているのではないだろうか。先行研究に照らして言えば、冒頭の例(1)において、発言者が仮に「おもしろい

と思う」と述べた場合には、「おもしろい」という話し手の判断・考えを明確に提示するとともに、聞き手にもその思考内容の共有を働きかけることになる。一方、「おもしろいかなと思う」と述べた場合には、話し手は、「おもしろい」という判断・考えについて自分自身に疑問を表明する「独り言」形式をとることになり、これを「?おもしろいかなと思いませんか」のように、聞き手にその思考内容を確認する形にすることはできない。「と思う」によって聞き手には情報を投げかけるわけだが、聞き手と思考内容を共有するタイプの発話とはならない。あくまで発信は行っているが、聞き手とは、その見解についての判断の共有を回避する表現方法をとっていることになる。聞き手との対立・コンフリクトの生じる可能性を避け、ひいては自分自身の心理的負担を軽くするという機能を果たす点において、ブログ等における「～です」文との共通点が観察されるのではないかと思われる。

今後、さらに詳細にデータを集めるためには、「日本語話し言葉コーパス」(CSJ)等を利用するなどの方法が考えられる。

注

- 1) 他にも、会議等において、男性(50~60代)の発言者が物事の経緯を説明する際に、「～と考えてもらえればいいかな(っ)と思います」のように述べる例も観察される。発言の意味は、「～のように考えてほしい」、あるいは「このことの意味は、～ということだと考えてください」というものである。
- 2) 「むべなるかな」「～するの何かかなと思う」のように固定した形で用いられている例、また、自身の意見表明ではなく、「あなたも『そうかな』と思いませんか」と引用の形で用いられている例は除いた。

参考文献

- 泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- 小野正樹(2001)『「ト思う」述語文のコミュニケーション機能について』『日本語教育』110号 pp.22-31
- 小野正樹(2006)「新しい文法-『かなと思う』について-」『日本語学』第25巻第9号 明治書院 pp.46-56
- グループ・ジャマシィ編著(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 白川博之(監修)庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 鈴木智美(2012)「ニュース報道およびブログ等に見られる『～です』文の意味・機能-『～を徹底取材です』『～に期待です』『～をよろしくです』」『東京外国語大学論集』第84号 pp.341-357
- 文化庁(1990)『外国人のための基本語用例辞典(第三版)』大蔵省印刷局(初版1971年)
- 松岡 弘(監修)庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 国立国語研究所「少納言」
(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)
- 『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) 国立国語研究所 (http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cs/j/)